

# 泊瀬川

## 早み早瀬を

## 掬び上げて

## 飽かずや妹と

## 問ひし君はも

作者未詳(巻十一・二七〇六)

ら、「もういいか」と聞いた人はどちらに…と歌います。泊瀬と大原で場所は異なりますが、内容は酷似しています。

今回取り上げるのは

巻十一「寄物陳思」の部に収められた、川に寄せて思いを表す恋の歌です。「泊瀬朝倉宮」では雄略天皇が天下を治め、三輪山には大物主神が鎮座する、その神聖な地を流れているのが「泊瀬川」です。「三諸の神の帯ばせる泊瀬川」(巻九・一七七〇)とも詠まれます。

泊瀬川の流れの速い水を男性が手で掬い上げて、「飽きないか」と聞いてくれたことを思い出す女性の歌です。「早み早瀬」の繰り返しに、清らかな急流が想像できます。

「はも」は哀惜を示す終助詞で、二度と戻らない切なさを感じさせます。たとえば「古

やまと  
万葉がたり

事記」中巻では、渡りの神を鎮めるため倭建命の身代わりに弟橘比売命が海に入る際、「さねさし相模の小野に燃ゆる火の火中に立ちて問ひし君はも」(相模の小野の燃えさかる火の中に立つて、大丈夫かと聞いてくれたあなたよ…と歌います。火攻めの危機の中でも優

しかった倭建命を思い出しつつ、入水すれば二度と会えないことを覚悟して「君はも」と歌います。その後、

今回の歌の作者にと

性水を掬って飲ませる場面を記す本もあり、男性が亡くなった後、女性は水を飲んだ場所に戻り、「大原やせか井の水をむすびつゝあくやと問ひし人

とき二度と戻らない鮮烈な思い出だったのでしょうか。その歌が「伊勢物語」に影響しているのかもしれない。(県立万葉文化館主任 研究員・阪口由佳)

また「伊勢物語」の諸本のうち、男性が女

せか井の水を掬いながら

【訳】泊瀬川の早瀬の水を手にくい上げて、「飽くことはないか妻よ」と言問いをしたあなたよ。

次回回は28日

# 石麻呂に われ物申す

## 夏瘦に 良しといふ物ぞ 鰻取り食せ

大伴家持(巻十六・三八五三)

今年の「土用の丑の日」は7月28日です。現代、日本では夏バテ防止のためにウナギを食べる習慣があり、ウナギの特売日として定着しています。ウナギにとっては大厄災の日といえます。

「土用」とは、四季の変わり目となる立春・立夏・立秋・立冬それぞれの直前の18〜19日間を指し、夏季限定ではないのですが、いまではほぼ「夏の土用」の意味で用いられています。

この歌からは、古代においてもウナギが夏瘦せに有効な栄養源として認識されていたことがうかがえます。ただし、「土用の丑の日」に食べる物という発想はなかったようです。

# やまと 万葉がたり

作者である大伴家持は、同時に「瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはた鰻を取ると川に流るな」(三八五四)という歌も詠んでいます。あまりにも瘦せている石麻呂に対して、ウナギを捕ろうとして川に流されるなよ、とからかった内容です。

「万葉集」にはこれ

の歌の注として、石麻呂とは吉田老の通称であり、教養がある立派な人物だったが生まれつきとても瘦せていて、たくさん飲み食いしても飢えた人のような姿だったので、家持がたわむれにこの歌を作った、と記されています。身体的な特徴をとり上げてからかうの感心できませんが、石麻呂は「仁敏子」であるとも記され、徳のある敬愛すべき人物と描かれています。

【訳】石麻呂に私は申し上げたい。夏瘦せに良しというものですよ。鰻をとって召し上がりなさい。

二人はかなり親しい間柄だったと考えられています。それなのに「石麻呂にわれ物申す」鰻取り食せ」などとあえてかしまった言葉遣いしているのは、親しみを込めた冗談だと伝えるための工夫だったとみられます。

(県立万葉文化館指導 研究員・井上さやか)

次回8月25日

る人を嗤(わら)へる歌」と題されており、遠慮の無い表現からみて、